

我妻 榮 記念館

だより

第 10 号

発行日/2007年 2月 1日

発行/我妻榮記念館事務局

〒992-0045

米沢市中央3 4 38

TEL・FAX 0238-24 2211

立ち止まり
振り返り
またと行く
一筋の道だった
昭和三十一年
廣介

守一廿二
重三
昭和三十一年
我妻 榮



〈童話作家 浜田広介とは米沢中学の同級生。畏友の中であった。〉

一筋の道——我妻 榮と浜田広介

館長 今 田 久 夫

我妻榮と浜田広介は米沢中学校の同期生であるが、在学中二人の間にどのような交流があったかは詳らかでない。

大正三年（一九一四）卒業直後、我妻榮は米沢中学校の秀才ゆえ、周囲から難関の第一高等学校の合格を期待され、その重責を担って上京した。

他方、広介は卒業時に「これやこの卒業証書前にして悲しむことのなんぞ多々なる」の短歌を詠んでいることから、早稲田大学への進学は必ずしも明るく希望に満ちたものではなかったと推測される。

その後、二人の歩んだ道は異なるが、お互い畏敬の念をもつて生涯に交流がみられる。生前我妻榮が揮毫した色紙は極めて少ないが、その一つに「守一、無三、無二（一）を守り、無く、三無し」がある。

昭和三十九年（一九六四）我妻榮が母校興譲小学校を訪れた時に、相田校長の要請に応じて揮毫されたものである。

ここに記された「守一」とは東京大学の恩師鳩山秀夫、穂積重遠、末広徹太郎の三教授が研

究された民法学の三分野を集大成して「日本の民法の大系」を作り上げることである。

そのため東京大学退官後、切官職につくことを辞退し専ら民法学の研究に当たられた。その業績は膨大な著作であり、「民法講義」（全八巻）である。

他方、浜田広介が揮毫した色紙は数多く、その各々が詩情豊かで、温情溢れるものである。

その中に、昭和四十七年高島中央公民館前庭に建立された「回顧の碑」の碑文がある。

立ち止まり 振り返り またも行く 一筋の道だった

五十余年、童話作家として歩んだ感懐を情感込めて詠んだものと推察される。

我妻榮はある著書の序文に、「暮れようとす夕陽を仰ぎながら、険しくて遠い学問への道を、私はあえぎながら、歩み続けることであろう。」と書いている。

我妻榮は民法研究に、浜田広介は童話創作と異なる。「一筋の道」を歩んだが、それは決して平坦な道でなかったことは想像に難くない。

あの日 あの時

上杉鷹山公 入部200年記念 —公徳定額貯金—

山形市の戸石亭蔵（八十八歳）さんから我妻榮自筆の色紙資料をいただきましたので紹介します。（平成十八年八月）

昭和四十四年は、NHK大河ドラマ「天と地と」にあやかっ
て米沢郵便局では「落祖上杉謙
信公定額貯金」を発表しました。
昭和四十五年には「上杉鷹山
公入部二〇〇年記念公徳定額貯
金」を発表し好評を得ました。
この年の六月十一日依頼を受
けた我妻は、成見五平米沢郵便
局長に一枚の色紙を贈った。そ
れが「順流治水」であった。こ
の色紙は複製されて貯金利用者

水順流治

上杉鷹山公
入部二〇〇年記念
我妻榮

に贈呈されたものでした。

当時の吉池米沢市長、本田議
長、米沢女子短大上村教授らの
お力添えによるものでした。

そしてまた勤儉貯蓄高揚施策
を後世に残すため、郵便局が主
催した同年十月十七日貯蓄の日
記念植樹に出席をお願いされ、
ご夫妻で上杉記念館前庭上杉鷹
山公銅像左側に、銘木「白梅も
どき」を植樹されました。（初
めての記念植樹と思われる。）
平成十年五月七日、米沢郵便
局で保管してあった我妻榮揮毫
のこの色紙は、小田稔局長から
我妻榮記念館に寄贈されました。

「順流治水について」(解説)

いたずらに水に逆らって治水
工事をするのが治水ではない。
水の流れに順いつつ水を治め
てこそ真の治水である。政治に
於ける治国もまた同様である。
水の本性を知り、時間、空間
の動きを洞察し、これに順って
水を治めると同様に人間の本
性を知って尊重し、歴史的な
動きを把握しこれに順って治
国を行った人、これが上杉鷹
山公である。「順」を思うは
君子の道といわれている。
われわれもまた真に人間を
尊重し、歴史的現実を把握し
て世に処したいものである。

(上村良作)

【戸石亭蔵の日記】

このたび情報をいただいた戸
石さんは、当時米沢郵便局貯金
課長として勤務されました。

米沢市、議会、商工会議所、
興譲館高校、米沢女子短大、特
に米織同業組合にお世話になり
ましたとのこと。
貯金通帳袋に「鷹山公」と「米
沢織」を印刷して配付したとこ
ろ大変好評であったと思いい出を
書いていただき当時のグッズな
どいただきました。



▲上杉記念館前庭で御夫妻の記念植樹
◀旧米沢郵便局正面に掲げられた垂れ幕

「自頼奨学財団」の設立と現在

昭和四十一年、我妻榮先生は、
母校米沢興譲館高校に、ご自分
の文化勲章の年金及び多くの私
財（当初の総額は約一六〇〇万
円に及ぶ）を寄贈され、「自頼奨
学財団」を設立された。財団か
らは興譲館高等学校に学ぶ者の
中で、経済的に苦しい家庭の生
徒に対し、各学年三名を原則と
して奨学金が給付される。また、
財団では、興譲館高等学校と興
譲小学校にそれぞれ自頼文庫、
まがき文庫として継続的に図書
を寄贈している。

我妻先生は、父母の慈愛と、
篤志家の育英資金によって大学
を卒業することができたことを
生涯の恩とし、生活に多少でも
余裕ができたなら、父母の慈愛に
報いるとともに、ご自分が受け
た育英資金を社会に返したいと
念願しておられた。その宿志が
財団の設立に至ったのである。

財団は、米沢中学校の教師で
あった先生の父、又次郎の愛称
「地雷也」に因み「自頼奨学財団」
と命名された。とくに「自頼」
という字をあてたことには、他
人の世話にならうとする者に対
し、自立心の必要を諭そうとす
る趣旨も含まれている。

その後基金の増資が行われた
ものの、現在は低金利の影響を
受け、運用面で厳しい状況にあ
るが、先生の意に賛同された多
くの方々のご協力を得て運営し
ている。
平成四年から毎年、奨学生と
その保護者が参加し、「我妻榮
先生に学ぶ会」を実施している。
今年度は、奨学生八名、保護者
九名、学校関係者三名の合計十
十名が参加した。我妻榮記念館
の環境整備を行うとともに、記
念館館長に講話を頂き、この会
が我妻榮先生のご遺徳を偲び、
米沢の偉人の志を学習する場と
なっている。
平成十九年一月十一日現在、
恩恵を受けた奨学生は、現役高
校生を含め二八五名にのぼる。
(自頼奨学財団書記局)



来館者のコーナー

米沢市立興譲小学校の校区内に我妻榮記念館があります。

興譲小学校三年生の社会科見学で記念館を見学していただきました。

十月二十三日は肌寒い天気だったので、近くの公園での昼食を変更し記念館を開放しました。児童全員から見学のお礼状が届きましたのでその一部を紹介します。

*わがつまさかえ記念館のみなさん、見学の時はどうもありがとうございました。さかえ先生はとてもえらい人だとわかりました。お家も、しりょうも、写真ものこつていてすごいと思いました。私もさかえ先生のようにになりたいです。

*わがつまさかえきねんかんで色いろお話しを聞いてからさかえ先生のべんきょうべやに入らせてもらってさぶとんの上にすわらせてもらったら頭が良くなるようなきがしました。

*わがつまさかえ記ねん館で、さかえさんのことがいっぱいわかってとてもうれしかったです。

さかえさんの部屋に行って、いろいろわかってわたしもさかえさんみたいな頭のいい人になりたいです。いろいろありがとうございました。

*わがつまさかえさんのへややさかえさんのことがよくわかりました。ありがとうございます。そしてみんなに知らせたいことがいっぱいになりました。ありがとうございます。

*わがつまさかえさんのすんでいた家にちよくせついつてわがつまさんのへややわがつまさんの書いたものをみたりしてとてもべんきょうになりました。ありがとうございます。

*わたしはさかえさんのみにつけていたもの、もっていたもの



をみれてべん強になりました。できれば土曜日、日曜日にまた行ってみたいです。またわかないことがあつたらみにきます。本当にありがとうございます。

*わがつまさかえ記念館のみなさんこのまへは見せてもらってありがとうございます。わがつまさかえさんの小学生のころのこともよっぐどわかりました。テレビにうつっていたのですごくゆうめいだったとわかりました。ぼくはもっともつわがつまさかえさんのことがしりたいと思っています。

*この前は、校外学習で榮さんがどんな人だかよく分かりました。榮さんがギブスをしていながらも写真でわらっていて、とてもすごい人だなと思いました。ありがとうございます。

*見学させていただいてありがとうございます。記念館が榮さんのお家とは、はじめて知ったし、おどろきました。榮さんのことがよくわかりました。ありがとうございます。また行きたいです。

*ありがとうございます。わたしはビデオやお話でいろいろわかりました。わがつまさかえさんはかーどやいろいろ作って

いたなんてしらなかったの、はじめでわかりました。なあ、と思いました。ありがとうございます。

*どうもありがとうございます。さかえさんのおへや、むかしに書いた本、とてもあたまのよい人だと思いました。学校を休まなくてよかったです。めいじ時代はほんとにむかしな感じです。お店から近いからまたいきます。

① 8月24日/日本文化大学法学ゼミの皆さんが夏休みを利用し、我妻榮記念館を学習見学されました。

② 10月8日/学習院大学教授遠藤浩先生のゼミで勉強された皆さんが、先生のふるさと米沢を訪れ、先生の恩師である我妻榮先生の生家我妻榮記念館を見学されました。(二階堂グループの皆さん)

③ 10月25日/長井市あら町「母の会」の皆さんが地域学習のため我妻榮記念館を見学されました。



回想 日々の我妻榮 ①

我妻榮は
グルメだったか？

名誉館長
我妻 堯



1961年頃 軽井沢にて

私が物心ついてからの我が家の食生活には二つの流れがあった。ひとつは当然父が幼少の頃から慣れ親しんできた米澤の伝統料理でみそ汁に重きがおかれ、大豆を叩きつぶしたうち豆などは子どもの時に叩くのを手伝わされた。戦後、電気冷蔵庫が普及すると豆腐をわざわざ凍らせて凍み豆腐を作ったこともある。もうひとつは西洋風の食事である。父が上京して最初に西洋料理の洗礼を受けたのは恩師の故鳩山秀夫東大教授（鳩山一郎の弟）の家庭である。鳩山夫妻の日常生活は食事以外でも極めて西洋風であったが、父はそれの家に招かれてご馳走になつた際に、かなりカルチャーショックを受けたりらしい。料理のひとつは牛の腰骨を茹でてスープの「だし」を取った後に、中の髓を掻きだして塩を混ぜてパンに塗って食べるもので、子どもの頃に食べることがある。結婚後は若い時パリに数年滞在した母による西洋料理が主体となったことは言うまでもない。彼女は料理好きの上にもめずらしいものには何でも興味を示す性質であったから、様々な料理を作っていた。肉屋に分けて貰った豚の胎児を料理したこともある。若い法律家が我が家に集まって勉強会を開く時などは学者達が珍しい料理を楽しみにしていた。一家の慶事や外国の賓客をもてなす時には本郷三丁目近くの天ぷら屋、「天満佐 か上野池之端」志満亭の日本料理がごひいきの店であり、寿司は嫌いでなかったが寿司屋に連れて行つて貰った記憶は全くない。夏休みには軽井沢の別荘で過ごしている時は原稿書きの合間の息抜きに近くの農業用水池に釣りに行き、獲物の鮒を串に刺して囲炉裏の廻りに立てて乾燥させ、唐揚げにしたり、鯉は自分で捌いて「あらい」や鯉こくを作るのを楽しみにしていた。魚を器用に捌くのが得意で、泥鰌を丸のまま煮るといやがるお客にわざ

わり大きい泥鰌をウナギのように裂いて料理することもあった。酒については「俺は質の酒豪だ」と言うのが口癖で、量はあまり飲まないが美味しい酒を適量楽しむタイプであった。また煮るといやがるお客にわざ

我妻榮記念館維持
補修に多額の寄附

この度市内在住の遠藤広子様（八十四才）から、我妻榮記念館の維持補修に役立ててくださいと、〇〇万円の寄附申し出があり、十一月、我妻榮記念館で受納式を行いました。米沢有為会安部米沢支部長からお礼を申しあげましたが、当日はご本人が体調をくずされ、ご子息の降さんが代理されました。ご本人からご挨拶として、寄附に至る経緯を書面でお知らせいたします。

米沢は藩政時代から由緒正しい伝統と進取の気性にとんだ独特の文化に培われてこの町独自の風習、風物を永い間継承してきてくださった先人の方々の色々なご努力に對しまして心から感謝申し上げます。いつか私も何かお役に立てる事があつたらこの町にご恩返しをしてこの世を終わりたいと思っておりますのに今迄何もなす事なく日々暮らして参りましたが最近体の不白出さにもう寄る年波になってしまいました。米沢有為会の事は終戦後、他よりお聞きして存じておりました。米沢出身で政財界で活躍されました池田成章、池田成彬の両先生、立法学者の泰斗、我妻榮先生や建築界の大御所伊藤忠太博士、官財界政界でご活躍された宇佐美先生ご一家等々皆様各界のトップブリッターと成られた方々のご尽力に依り学問振興の精神をその中心におきまして創設されたと伺っております。



米沢で生まれ育ち生活して参りました私は、幼い頃より米沢から出られた立派な方々のお話を両親より幼少の頃から常々聞かされて米沢に誇りを持って生きて参りました。

そのようなお偉い先生方のご努力にいつも大変ありがたいと思つており常々感謝の気持ちで一杯で毎日を過ごして参りました。又、常々拝観したいと思つていました所、偶然にも機会を得

て去る九月初めに我妻榮記念館に入館させて頂きまして中に収蔵されております沢山の記念物を拝見させて頂きすっかり感激いたしました。そこで館の運営は、米沢有為会であることも知りました。

現在は国・県・市町村等どこでも行財政改革で財政事情も厳しく記念館の維持や雪下ろし雪片づけ等にも大変御苦労が多いとお聞きしました。それでほんの貧者の一燈で恥ずかしいとは思いましたが、寄付を申し出ることにしました。最後に成りますが米沢有為会の今後の益々の御発展を心からお祈り申し上げ私のささやかなお礼の言葉とさせていただきます。

平成十八年十一月二日
米沢市中央五丁目三十一番
遠藤 広子 拝

